

前回までのあらすじ

流遠るしおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための

存在——〈機獣少女〉きじゅうだった。

やみひめは帰ってきた。

その姿は高校生くらいの美しい姿ではなく、本来の小学六年生の可愛らしい姿で。

だが、見た目こそ以前の通りでも、内面には大きな変化が起きていた。『もう一人の自分』との再会と別離を経て、一つとなった事で得た能力と知識。それは十二歳の少女が持つにはあまりに大きく、危険なもの。

それでも少女は恐れない。

やみひめにとって、それは必要なものだから。

戦うために。

そして、護るために。

ツバキとの出会いから始まった一連の出来事に、決着の時が近付いていた。

登場人物

◆流遠るしおやみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂たかちほツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるMBデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘たちばなアサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウド・P・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れた大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲かみじょうハン

やみひめとクラウドのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウドとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL REUNION**

「両断するもの」——その威を恠せ！」

叫び、やみひめが手にした黒塗りの長剣を振り上げると、刀身が紅い光を帯びた。光は刀身の五倍以上——約六メートルもの長さとなり、普通に考えれば明らかに長すぎる。確かに武器の有効範囲が広いほど戦闘には有利だが、長すぎる得物は取り回しが悪く、懐に入られば使い物にならなくなってしまう。

やみひめは常識外れな長さの紅い光を帯びた長剣を、大上段から振り下ろした。技も型もなく、ただ力任せに叩きつけられた紅い光の刃は案の定、あっさりと敵——黒いドレスを纏った少女・クラウに躲されてしまう。

しかし——

「ええええいッ！」

やみひめは地面を両断した紅い光の刃を真一文字に左に振り、大量のアスファルトと土砂を巻き上げながらクラウを追尾した。

「——ッ!？」

クラウの動揺がはつきりと伝わる。当然だ。こんな常識外れで取り回しの悪いサイズの物を、こうも軽々と扱えるとは思わないだろう。軌道を変更し、しかし回避が不可能と判断すると、彼女は爪の折れた手甲を眼前に掲げて防御態勢をとった。

人間が技を鍛えるのは、結局のところ弱いからだ。道具を使うのも、戦術を立てるのも、すべて生物としての弱さをカバーするための手段でしかない。

しかし敵より圧倒的に強ければ、策を弄する必要はない。力押しでいいのだから。

やみひめの戦い方は、そういう類のものだ。

だが、それも致し方ない。いくら能力と知識があろうと、やみひめはつい数日前までは普通の小学生だった。戦い方を知っていて、それが可能な肉体であっても、実践出来るかどうかは別の話だ。訓練が要る。いきなり効率の良い戦い方など出来るはずもない。

「——ツバキ！」

「！」

クラウを追尾していた長大な紅い光の刃を、防御態勢をとっていた手甲に触れる寸前で止め、やみひめが声を上げた。まるで彼女の注意をわざと引くように。

不意を衝くなら背後から。そのセオリーに則り、クラウはドレスのスカートを翻し、振り向きざまに後ろ回し蹴りを放つ——が、そこには誰もいない。

プッ
ハッタリだ。

黒いドレスの少女はやみひめを再び視界に捉えようと向き直るが、すでに先の場所には誰もいない。周囲を見渡しても同様だ。あれだけ巨大で目立つ武器を持っていれば、視認

するのは容易いはずなのに。

「……………」

咄嗟にクラウが直上に視線を向けた。気付いたのだろう。前後左右にいなければ、頭上だと。さすがに一瞬で地面に潜るのは不可能だし、掘り起こした痕跡もない。あとは姿を見えなくしている可能性だが、そうであれば対処のしようがない。

直上を仰ぎ見るクラウの目が、わずかに囁ったように見えた。

——いた。

自由落下と呼ぶには勢いのついた速さで、黒い和服姿の少女が舞い降りてくる——やみひめだ。

クラウはほんの一メートルほど後方に跳び、すでに爪の砕けきった両の手甲を構えた。翼を持たない人間が空中で軌道を変える事は出来ない。やみひめの着地の瞬間を狙う算段だ。

だが、クラウはまたも咄嗟に身体の向きを変えた。肌を粟立たせる本能的な危機感を覚え、反射的に手甲を払うように振った。直後、表面を軽く焦がすような音を立て、手甲に衝撃が伝わる。

飛び道具だ。衝撃の回数から、射撃は三発。弾種は判らないが、衝撃の軽さから実体弾とは考えにくい。

何処から——と、クラウが射線上に視線を走らせたその時だ。

「——点 火！」

『First bullet』

すでに着地を終えていたやみひめが叫ぶと、呼応するように手にした黒塗りの長剣（ヤタガラス）が機械音を発した。同時に、（ヤタガラス）の持ち手付近にある三つの出っ張り——その一つが本体に押し込まれる。続いて炸裂音が鳴り、刀身が高熱を帯びる。その熱は大気中の水分だけでなく、肉眼では視認出来ない塵まで蒸発させ、周囲を揺らめかせて見せるほどだ。

防御は不可能と判断したのだろう。クラウは後退しつつ、右の手甲をやみひめに投擲した。

「はあああッ！」

裂帛の気合と共に振られた（ヤタガラス）の刀身に触れた瞬間、手甲は真っ二つに溶断され、ようやく気付いたようなタイミングで爆散した。

（ヤタガラス）の威力に戦慄を覚えたのか、クラウの足運びがわずかに乱れる。この機を逃すまいと、（ヤタガラス）を構えたやみひめが追撃する。接近戦においてはほぼゼロと

言ってもいい至近距離——にも関わらず、クラウはドレスの両肩を展開させると、そこから二門のバルカン砲が顔を覗かせた。撃てば互いに被害が出る。だが、ダメージが大きいのは明らかに撃たれる方——やみひめだ。

しかし、やみひめの表情に恐怖の色は浮かんでいない。

「——ッ!？」

苦悶の声を上げたのはやみひめ——ではなく、クラウの方だった。バルカン砲の銃身が回転を始めた直後、直上からの射撃を受け、二門とも銃弾を吐き出す前に破壊されてしまった。

クラウが反射的に直上に視線を向ける。そこには背の高い街灯が見え、弓道着に似た赤い和服を纏った少女が、弓のような武器を構えていた。

ツバキだ。先ほど着地のタイミングを狙われそうになったやみひめに対して、援護射撃を行ったのも彼女だろう。だいぶ消耗しているはずだが、ツバキはクラウと目が合うと、やや挑発的なニュアンスを込めて澄まし顔を浮かべた。

すぐにでも応じたい——が、まずは至近距離にいるやみひめの方が脅威度が高いと判断したのでらう。クラウは残った左の手甲からレーザー・ブレードを生成し、崩れた体勢のまま強引に光学兵器の刃を振る。

至近距離から掬い上げるような軌道で迫るレーザー・ブレード。それに対し、やみひめは〈ヤタガラス〉の持ち手の下にある発振器から現出させた二股の光——『レーザー・ジユッテ』で迎撃した。黄色く輝くそれは、時代劇の役人が持っている十手を彷彿とさせる。

予期せぬ装備に戸惑ったような挙動を見せつつも、クラウは背中、破壊されずに残った一基のスラスターを噴かせた。二門の噴射口が生み出す爆発的な推力によって、自身が弾丸となり、レーザー・ブレードを強引に押し込んで突進する。

「……………」

しかし、それは哀れなほど簡単にやみひめに躲かれてしまう。本来は二基のスラスターで推力を得て、放射状に広がる左右の『機械の羽根』によって制御する。不完全な今の状態で、本来の機動性の半分も發揮されないのでは、それも道理だ。

それどころか——

「?」

やみひめとすれ違った直後、クラウは体勢を崩して、地面を盛大に削り取る結果となった。すれ違いざま、左の手甲と『機械の羽根』が〈ヤタガラス〉によって溶断され、完全に制御を失ったのだ。

やみひめが振り返ると、クラウはゆらりと立ち上がり、同じように振り返った。

黒い和服に身を包み、その背に鋭利な刃を思わせる六枚の羽根を生やしたやみひめ。

相對するクラウの黒いドレスはポロボロで、その背の『機械の羽根』も左側が失われてしまっている。無表情で何も語らぬのが、余計に悲壯感を高めているが、本人にそんな自覚があるのかどうかは窺い知れない。

「やみひめさん、もう彼女に武器はないはずです」

やみひめの隣に降り立ったツバキが、クラウから視線は外さないままに言った。やみひめと違い、ツバキは訓練を受け、実戦を生き抜いてきた戦士だ。どれだけ優勢であっても、決して油断をしない。

そんな自分より年下の少女の姿に、やみひめは内心で複雑な想いを抱く。生まれ育った環境が違う以上、自分の立場で押し量^{はか}つても詮^{せん}無い事だと判ってはいても。

『——ふむ。仕掛けるなら頃合いだな。手があるのだろう、やみひめよ』

ツバキの得物^{えもの}である弓状のMBデバイス（カグツチ）が、女声を思わせる時代があった口調の機械音声で告げた。

「うん。ありがとう、ツバキ、（カグツチ）。手伝ってくれて」

「当然の事をしたまです」

『もつとも、必要なかったやもしれぬがな』

ツバキの謙遜^{けんそん}も、（カグツチ）の冗談めかした自嘲も、確かにその通りかもしれない。

やみひめ一人でも、クラウを無力化する事は出来ただろう。

それでも——

「そんな事ないよ。絶対でない。だから……やっぱり、ありがとうだよ」

やみひめの浮かべる邪気のない笑顔に、毒気を抜かれたようにツバキと（カグツチ）はきよとんとしていたが、すぐに我に返って思い思いの言葉を返した。

「じゃあ、あとは私の役目」

言い、やみひめがクラウに向かって歩を進める。ツバキはそれを黙って見送る。（カグツチ）も同様だ。

「^{ディバイダー}分断するもの——」

やみひめの言葉に応じるように、背中の六枚の鋭利な羽根がわずかに振動する。それは羽根に見えるが、実際にはアンテナだ。彼女の能力である（E. I. アビリティ）、その制御アンテナ。（E. I. アビリティ）は大まかに二種類あり、防御などの自身に使う事をメインにしたものなら必要ないが、攻撃などの他者に対して使うのが前提の能力を使う場合、

羽根——E. I. アンテナの展開が必須となる。更に後者の場合、能力を発動する際の

セーフティ・リリース　アクティベート・ヴォイス
安全装置解除のため、発動言語の発声が必要。暴発を防ぐためだ。

やみひめの右手が紅い光を帯び、〈分断するもの〉が発動可能な状態に移行する。あとはクラウに対して発動させればいい。

やみひめとクラウの距離が縮まる。もう、お互いの顔がはっきりと見える。

「くらう、迎えに来たよ」

親友からの呼びかけに、満身創痕のクラウは無言を返す。無表情は変わらずだが、すでに限界が近いのは明らかだ。それでも徒手空拳で彼女は戦おうとしている。爪は砕けても、戦う意思は砕けていない。

「くらう……」

「——ッ！」

やみひめが更に距離を詰めた瞬間、クラウが踏み込んだ。その間合いに入るのを待っていたのだろう。すでに比翼となってしまう『機械の羽根』を稼働させ、ほんのわずかな距離を駆けた。

「……………！」

後方で事態を見守っていたツバキが息を呑む。やみひめとクラウのシルエットが重なり、密着状態となっている。遠目には抱き合っているようにも見えるが、相当な勢いで迫ったクラウの突進を、やみひめが止めたのだ。よくよく見れば、クラウのボディブローはヒット直前で停止し、逆にやみひめの右手が、手刀のようにクラウの胸の中心に突き刺さっていた。

いや、それも正確には違う。やみひめの右手は、クラウの胸元に発生している闇のような『黒い霧』に突き刺さっている。その光景は剣を飲み込む手品のようで、『黒い霧』に突き入れたやみひめの手首から先は見えない。その状況に愕然とした表情を浮かべるクラウを余所に、やみひめは右手の〈分断するもの〉を発動させる言葉を告げる。

「——その威を示せ！」

直後、眩い紅い光が周囲を照らす。

「……………」

だが、それはやみひめが想定していた効果とは違ったらしく、彼女も動揺の色を浮かべている。

光が広がる。

紅く、紅く。

世界がどこまでも紅い色に染まっていく——

第十七話

『機獣少女とカタストロの真実』

気が付くと、其処はさつきまでいた夜の駐車場じゃなかった。窓も時計もないから時間は判らないけど、蛍光灯の光に照らされた室内には、びっしりと本がある。壁という壁に本棚が置かれ、すべての棚に当然のように本が収まっている。学校の図書室レベルじゃない、図書館という表現でも足りない、市民図書館を遙かに超える大図書館。

「……………」

見えている範囲だけでも体育館より広い——というか、全容が把握出来ない。さすがに天井は見えるけど、たくさん本棚のせいもあるって、『果て』が見えない。あまりの規模に、ぼかんとしてしまう。

それでも、とりあえず出口を探して移動すると、部屋の中央っぽい場所に着いた。其処だけは本棚が置かれずに、ちよつとした広場みたいになっている。貸出カウンターみたいなスペースがあるけど、誰も座っていない。そういえば、利用者の姿もない。だけど部屋には明かりが点いていて、まるで私だけが取り残されたみたいなさびしさがある。

「——やみひめさん！」

案内図らしきものを見つけたので、出口の場所が判るかもしれないと近寄ると、不意に名前を呼ばれた。よく知っている声の方を見ると、それはやつぱりツバキだった。サイドポニーにしたセミロングの黒髪。穏やかな色を湛えた蒼玉のような青い瞳。この状況でも取り乱している様子はなく普段通りだけど、服装も普段の私服に戻っている。一緒にデパートで買ったものだ。そういえば、私もMBジャケットじゃなくて、見覚えのある普段着姿だった。

「良かった。ツバキも無事だったんだね」

不思議に思いながら、それでもまずはお互いの無事を喜んだ。

「はい。ですが、この場所は……………」

ツバキも私と同じで、この状況を把握している訳じゃないみたい。いったい何処なんだろう？

「状況を整理しましょう。先ほどまで、私達は夜の駐車場でクラウドさんと戦っていた。そして、やみひめさんがクラウドさんに対して、何か特別な力を使った」

「うん。あれでくらうから（カタストロ）を切り離せるはずだったんだけど……………どうなったんだろう？ 紅い光が広がって、それから——」

私が記憶を正確に思い出そうとしていると、ふと気配を感じた。

「————」

気配のする方に、ツバキと同時にぱつと視線を向けると、其処そこに立っていたのは私のよく知る相手だった。一部だけ白いメッシュが入った長い黒髪と、真紅の瞳がパンキッシュな女の子。だけど本当は物静かで優しい、私の大事な友達。

「くらうー！」

私はその子の名前を呼ぶと、ツバキが止める間もなく駆け寄った。くらうも私達と同じ私服姿で、黒いドレスも、爪みたいな手甲てこうもしていない。表情はないままけど、攻撃的な意思も感じられなかったから、不用意だと判っていても自分を抑えられなかった。

「くらうー！ 私だよ、判る？」

くらうのすぐ目の前に立って呼びかける。私の背後では、ツバキが警戒しているのが気配で伝わってくる。もし、くらうが攻撃の意思を見せたら、ツバキもすぐに行動を起こすだろう。けど、くらうは攻撃的どころか、不思議そうな視線を私達に向けている。

「くらう……？」

「クラウさんは、普段はこういう感じなんですか？」

リアクションらしいリアクションを見せないくらうに警戒レベルを下げたのか、ツバキは臨戦態勢は維持したまま、私の隣に並んだ。

「えっと、こう見えて実はおっとりしてるところもあるけど……」

それでも、なんとというか、こんな不思議ちゃんっぽい感じじゃない。くらうの事をよく知らない人は、近寄りがたいって感じるくらいだから。

「Rudesse. Filles d'une famille d'aristocratie」

「——ふえ!? な、何……?」

唐突にくらうが口を開いた——多分だけど、フランス語だと思う。

「……何処どこの言葉ですか？」

「あ、くらうはクォーターで、たしかフランス語も少し話せるって聞いた事があるけど……」

…

実際にくらうがフランス語を話すのは初めて聞いた。でも、どうして急に？

「——失礼。お嬢さん達。この言語は複雑なので、解析に時間がかかってしまった」

また唐突にくらうがしゃべった。今度は日本語だけど、口調はいつもと全然違う。

「まず確認をさせてください。あなたはやみひめさんのご友人のクラウさんですか？」

戸惑う私を尻目に、ツバキが会話の口火を切った。くらうはツバキに視線を向けると、「違う」と簡潔に答えた。

「……では、クラウさんに取り付いた〈カタストロ〉ですか？」
率直な問いに、私だけじゃなくてツバキ自身も緊張している。

「そうだ。私は君達が『災厄』と呼ぶ存在で間違いない」

私達の緊張なんてお構いなしに、くらう——〈カタストロ〉はあっさりと肯定した。

……………

私もツバキも言葉が出ない。意思の疎通が出来ないと思っていた相手と、対話する機会が出来た。だけど、コミュニケーションが取れるからって、思考形態や倫理観も同じとは限らない。同じ人間、同じ国民、家族とだって判り合えない事があるんだから、不用意な発言が取り返しのつかない事態に発展する可能性を考えてしまう。

「——君達はなぜ、私の邪魔をする？」

また唐突にくらう——の姿をした〈カタストロ〉が言った。会話のきっかけや、ワンクツション置くみたいな発想がないのは、人間じゃないからかもしれない。

「……『邪魔』というのが何を指しているのか、具体的に示してもらえますか？」

探るようにツバキが答えた。やっぱり、すごい。この状況でも冷静でいられるんだから。

「この依代よりしろとして^よいる少女の行動に対する妨害の事だ」

「クラウさん……その少女の行動は、あなたの意思ですか？」

「それは私の質問に答える上で必要な情報か？」

「そうです」

二人の会話は落ち着いている。声を荒げてもないし、乱暴な口調でもない。なのに、息が詰まるような緊張感があつて、私は口を挟めない。

「この依代として^よいる少女の行動は、彼女の願望に基づくもの。それはつまり、彼女の意思だ」

「クラウさんが望んで人を傷付けようとしていると？」

「肯定だ」

「そこにあなたの意思は介在していない——そう受け取っても？」

「肯定だ」

くらうの姿をした〈カタストロ〉の言葉に、頭を殴られたみたいな衝撃を受けた。大学生のお姉さんを病院送りにしたのも、その病院に現れたのも、途中で警官隊と衝突したのも、私達と戦ったのも全部——くらう自身の意思？

「嘘だよ！ くらうは優しい子だもん！ 争い事は嫌いだし、人を傷付けたりもしない！」
私は思わず叫んでいた。くらうの事を全部判ってるなんて言うつもりはないけど、私の知っているくらうはそういう子だ。だから仲良くなれた。〈カタストロ〉の言った事が本当

だったとしても、信じたくないし、何か理由があったのかもしれない。

「私は……!」

言葉が続かない。くらうを信じているけど、それは私の勝手な願望かもしれない。信じているんじゃない、信じたいただけ。ただ裏切られたくないだけ。裏切られるのが怖いだけ。それは結局、信じていないのと一緒で……。

「——やみひめさん」

「!? ……ツバキ?」

ツバキの声に、はっと我に返る。ツバキは私の両手を握って、凜とした表情で私を見ていた。澄んだ青い瞳に見つめられると、不思議と気持ちが悪く落ちていくような気がする。「落ちていくください。すべて〈カタストロ〉の言い分です。まだ、そうと決まった訳ではありません」

そう言っつてツバキは、私に優しく微笑^{ほほえ}んだ。

「私の言葉に虚偽はない」

「そうかもしれませんが。ですが、あなたの言い回しが気になりました。クラウドさんの行動は彼女の願望に基づくもので、だから彼女の意思だと言いましたね?」

「肯定だ」

「それは三段論法ではありませんか? クラウドさんの願望を曲解し、それを叶える手段として、あなたが人を傷付けさせようとした。傷害を正当化させる理由を提示して」

ツバキが言う三段論法っていうのは、乱暴に言えば『こじつけ』だ。もちろん、ちゃんとした応用もあるけど、ツバキが言ったみたいに、行為を正当化させるための理論武装として使われる事が多い気がする。

「彼女の行動によって私が利益を得る事はない」

「では、クラウドさんに対して一切の強要・恫喝を行っていないと?」

「……………」

「クラウドさんは自分の願望、もしくはそれを叶える行為を否定しませんでしたか?」

「……………」

ツバキの問いに〈カタストロ〉は答えない。それはつまり——

「なんとなくですが、あなたがどういう存在なのか見えてきました」

「つまり、くらうには願ひ事があつて、それを利用して……つて事でいいの?」

「そういう事でしょう。クラウドさんと戦った時も感じましたが、彼女の目は、戦闘や殺傷行為を楽しむ^{たが}ひ類の人種のそれではありませんでした。尋常でない様子からして、明らかに何らかの操作を受けています」

違いますか——そんな意味が込められたツバキの視線を受け、〈カタストロ〉は口を開いた。

「確かに、この少女は自分の願望を叶える事を拒否していた」

その言葉に安心して、私はほっと息を吐いた。やっぱり、人を傷付けたのはくらの意思じゃなかったんだ。

「では、なぜクラウさんの意思を捻じ曲げるような事をしたんです？ いえ、まずはクラウさんに取り付いた経緯から訊くべきですね」

ツバキの問いに、〈カタストロ〉は拍子抜けするくらい素直に答えた。ツバキと共に地球に転移した〈カタストロ〉は、ツバキの代わりに〈機獣少女〉に変身した私——すぐに〈カグツチ〉に代わってもらったけど——と戦って消耗した後、自分の呼びかけに応えたくらうを隠れ蓑みにしていたらしい。ある程度回復した〈カタストロ〉は、お礼としてくらの願いを叶える事を提案したけど、それを拒否された。それなのに——

「いって言ったのに、無理にくらの願い事を叶えようとしたの？」

〈カタストロ〉の話を要約するとそういう事になる。

「肯定だ」

「それは親切の押し売りというものです」

悪びれる様子もない〈カタストロ〉の返答に、ツバキは完全に呆れ顔だ。

「どうしてそんな事を？ あなたには何の利益もないのでしょうか？」

「お節介が趣味とか？」

ツバキが不機嫌そうだったから、場を和ませるつもりで言ったんだけど、ちよつと不謹慎だったかもしれない。そんな風に思っていると——

「肯定だ」

と、〈カタストロ〉は答えた。

「正確には、他者の願いを叶える事が我々の存在理由だからだ」

「え？」

「……どういう意味ですか」

私もツバキも——ひよつとしたらツバキの方が動揺しているかもしれない。ツバキは〈機獣少女〉で、〈カタストロ〉を殲滅するための存在だから。

「言葉通りの意味だが？」

何を訊かれているのか判らないといった〈カタストロ〉の口調には、純粹な疑問しか感じ取れない。少なくとも、誤魔化しているようには聞こえない。

「つまり、あなた達は他者の願望を叶えるために存在し、行動しているか？」

「肯定だ」

ツバキの確認するような問いかけに、〈カタストロ〉は一切の躊躇なく答えた。

それが本当だとしたら、人間とは明らかに異質な存在だ。人間は利己的な生き物で、何よりも自分を優先する。それは否定のしようがない。

「自分に何の利益もないのに、他者の願いを叶える事に、どういう意味があるんです」

ツバキの疑問はもつともだ。でもそれこそ、人間とは違う存在理由を与えられた〈カタストロ〉にとっては、意味の判らない質問だろう。

「存在理由に意味を求めるのか。しかしそれは、我々より複雑な思考形態を持つ君達の弊害だ」

〈カタストロ〉の言葉に嘲りや憐れみは感じられない。ただ純粹に、人間という存在に對してそう思ったのだろう。断言は出来ないけど、多分、地球上で生きる事に意味や理由を必要とするのは人間だけだ。理性や知性があるから、人間はほかの動物と違う。

——でも、違う必要がある？

そんなつもりはなかったかもしれない。でも、〈カタストロ〉が言った事は、人間という存在の否定だ。本能だけで生きる事を許されない人間に対する——禁忌の言葉だ。

「……あなた達の存在理由については理解しました。クラウさんの願い事についても、内容には言及しません」

それはプライバシーに関わる事ですから——そう付け加えて、ツバキは本題に移った。

「私が知りたいのは、あなた達がゼヘナ——私の星に現れて、『消滅現象』を起こそうとする理由です。それも誰かの願いなんですか……？」

ツバキの住む惑星ゼヘナ。其処にある高効率の発電施設である〈ジェネレーター〉。〈カタストロ〉がそれに取り付き、周囲一帯を巻き込んで自爆する——それが『消滅現象』だ。被害は初めて確認された一度だけで、それを防ぐべく戦っているのが〈機獣少女〉と呼ばれる少女達。ツバキもその一人だ。

「肯定だ」

これまでと同様、〈カタストロ〉の口調には一切の躊躇も動揺もない。そこに罪悪感はなく、ひよつとしたら、そういう感情自体がないのかもしれない。

「それを願っているのは……誰です？」

ツバキの声に、これまでに感じた事のない緊張が滲んでいる。鬼が出るか蛇が出るか、まるで予想がつかない。知る事が幸せな結果に繋がる保証なんてない。世の中には、知ら

なくていい事と、知らない方がいい事がある。好奇心は猫を殺すから。

「無論、君達が〈ジェネレーター〉と呼んでいる施設だ」

「ありえませんが。施設が意思を持つなど」

東方大陸——ツバキの住んでいる国にも、日本の『八百萬の神々』みたいな、あらゆるものに神が宿るっていう考え方はある。だけど、あくまで信仰に近いもので、実際に、しかも大規模な施設が意思を持つというのはファンタジーだろう。もちろん、人形や道具が意思を持つのもファンタジーではあるけど。

「君は〈ジェネレーター〉の核が何であるかを失念している」

「……………!?!」

〈カタストロ〉の言葉に、ツバキの表情が固まる。〈ジェネレーター〉の心臓、中枢、根幹を成すもの、それは——

「……MBコア」

「肯定だ。我々は〈ジェネレーター〉に組み込まれた機獣の願いに呼ばれ、それを叶えるために行動している」

かつて惑星ゼヘナに存在した最強兵器の総称である『機獣』——その核がMBコア。莫大なエネルギーを生み出すそれは、兵器としての機獣が必要とされなくなってから、新たな発電システムとして利用されるようになった。

「それってつまり、〈ジェネレーター〉に組み込まれたMBコアが、その……消滅したいと願ってるの?」

愕然となり言葉が出ないツバキに代わって、私が訊いた。その問いにも、やっぱり〈カタストロ〉は何の感慨もなく「肯定だ」と答えた。

「正確を期すなら、『消滅したい』ではなく、『終わらせてほしい』だがな」

黙り込んだ私達を見かねて——というより、誤解が生じるくらいなら、正確な情報を開示すべきと判断したのかもしれない。〈カタストロ〉は〈ジェネレーター〉に組み込まれたMBコアの、『終わらせてほしい』という願いの詳細を語って聞かせてくれた。

曰く、半永久機関であるMBコアは、戦闘などの外的要因で破損しない限り稼働し続ける。つまり、戦場でMBコアに致命傷を負わない限り、機獣は死なない。ゼヘナの大気組成が変化し、豊富な金属イオンが取り込めなくなれば話は別だが、そんな大異変が起きれば機獣以外の生物も死滅するだろう。

では、戦闘以外に機獣が死ぬケースはないかと問われれば——否だ。

一般的どころか、機獣に搭乗する事を生業とする者達にすら知られていなかった事だけど、MBコアには『 آپトシス』と呼ばれる自壊プログラムが組み込まれていて、機

獣は自分の意思でそのプログラムを作動させられる——つまり、自殺が出来る。

これは自爆とかの類たぐいじゃなくて、あくまで自壊。MBコアの機能を止めるだけ。

最愛の搭乗者と共に戦場で死ぬ事が出来ず生き残ってしまったり、長い時を生きる事に飽あいてしまったり、逆に満足しきった機獣が、自身で己の最期を決めるための手段。

尊厳を守るための権利。

だけど、〈ジェネレーター〉に組み込まれたMBコアからは、アポトーシスが失われてしままう。それは自分の意思で死ぬ事も出来ず、半永久的に生きる事を強制されているのと変わらない。

今時、永遠の命なんて誰も求めない。それが悲しい結末になる事を、誰もが知っているから。命は限られた時間の中でしか輝けない。これは綺麗事じゃなくて、多分、本当にそうなんだと思う。

だから、〈ジェネレーター〉に組み込まれて永遠に生かされているMBコアが、『終わらせてほしい』と願っている話は、きっと真実……。

話はこれですべてなのだろう。言葉が出ない私とツバキを見渡し、

「最初の質問に戻ろう——君達はなぜ、私の邪魔をする？」

と、言った。

そう。〈カタストロ〉が最初に告げた疑問。

それは、くらうの邪魔をする事を指していると思った。だけど今は違う。これは〈カタストロ〉全体の邪魔——つまり、『消滅現象』を阻止するために戦う〈機獣少女〉への問いだ。

「決まっています。『消滅現象』は街一つを道連れにする。其処そこに住む命や財産も。もちろん、規模の問題ではありませんが」

「では、MBコアの願いはどうなる？ それは勘定かんじょうに含まれないのか？」

『『知らなかった』で許されるとは思いません。しかし、無知は罪ではない。あなた達が『消滅現象』を起こす理由が判った以上、然しかるべき機関に報告し、対応策を——」

「君達の上層部は恐らく気付いている。我々がどういった存在で、何を目的に行動しているかも」

「！」

〈カタストロ〉の言葉にツバキが絶句する。上層部ってというのは、〈機獣少女〉を統括している組織の事だろうか。

「そんな……」

「気付いていて公表していない——それが我々の認識だ。君達の存在によって我々の行動

は阻止され、君達の世界はあらゆる意味で安定している。故に、状況に致命的な綻びが生まれぬ限り、現状が維持され続ける」

MBコアの苦しみは続き、「機獣少女」と「カタストロ」の戦いも終わらない。

その事実にも、ツバキは膝を折ってその場に頽れた。

「ツバキ!？」

私は慌ててツバキの身体を支えると、その絶望に染まった表情に言葉を失った。

ゼーナでのツバキを私は知らない。だけど、地球で出会って、一緒に暮らして、ツバキがどれだけ良い子かは知っている。ゼーナでもがんばっていたんだと思う。きっと、一生懸命にやってきた。「機獣少女」として戦ってきた。

事実を隠している人達にも理由があつて、仕方なかったのかもしれない。

けど、だとしても――

「そちらのお嬢さんは心が折れてしまったようだな」

私の背中に「カタストロ」の声がかかる。その声音には、やっぱり他意はなくて、ただ事実を告げているだけに聞こえる。

「君なら私の問いに何と答える?」

相変わらず、相手の気持ちなんて斟酌しない。それは人間と「カタストロ」の思考形態の違いによるもので、そこには是非はない。ただ存在としての断絶があるだけなんだと思う。

違うもの同士は判り合えない。

違っているから判り合えないのか、判り合えないから違っているのか、それすらも判らない。

私に判っているのは一つだけ。

「……………判らない――」

「ほう?」

私の答えが予想外だったのか、「カタストロ」はむしろ興味深そうな声を上げた。

「判らないよ。私はゼーナの人間じゃない。この国で生まれ育って、人並みに幸せに暮らしてて、特に不満もなく生きてる」

人間は他人と比べないと、自分が恵まれているかどうかなんて判らない。もしかしたら、私より何百倍も幸せな人間から見たら、私は悲しいくらいに不幸かもしれない。それでも、私が知る限り、私は幸せな部類の人間だと思う。ツバキと出会ってから、短い間にたくさ

んの事を考えた。その経験のためもあると思う。

「この幸せが続くなら、他の事なんてどうでもいいと思うかもしれない。だから、事実を隠してる人達を責められない」

人間は利己的な生き物で、私だって人間だから。

「もし私がゼヘナで〈機獣少女〉として戦う事になったら、あなた達の邪魔をしようと思う。でも、〈シエネレーター〉に組み込まれたMBコアの願いを叶える方法も探そうと思う。どちらも『思う』だけしか出来ないけど……今の私にはそれしか言えない！」

私は半ば自棄気味になって叫んだ。

「——〈ヤタガラス〉！」

虚空に闇が現れ、それが霧散すると、黒い勾玉まがたまが浮かんでいて、更に黒塗りの剣に姿を変える。私はそれを無造作に握り、

「撃ち砕くもの——その威を示せ！」

破壊の意思を示していた。特撮映画の巨大怪獣が吐く光線みたいな、極太の紅い一閃が大図書館を薙ぎ払う。無数の本棚、壁、天井、照明、一切合切、私の半径一メートルを除くすべてが破壊されていく。

それはくらの姿をした〈カタストロ〉も例外じゃない。

「形相けいそうに干渉するシステム——いや、能力アビリティか。まさか相見あいまみえる機会があるとは思わなかったぞ、ドラグーン」

すでに上半身と左足が消失した状態で、それでも〈カタストロ〉は立って、声は届いている。血が出たり、切断面から臓物がこぼれ落ちたりもしないけど、驚くような事じゃない。此処ここは現実とは違う空間だから。まだ何か言っていたみたいだけど、崩れていく大図書館が上げる悲鳴に掻き消されてしまっって、最後の方は聞き取れなかった。

「……帰ろう、ツバキ」

私はすぐ足元で失意に沈むツバキを抱き上げた。

「やみひめさん、私……」

「帰ろう？ 一緒に——ね？」

まだ心の整理がつかないんだと思う。俯うつむいてしまったけど、それでもツバキは、こくりと頷うなづいてくれた。

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REUNION』第十七話をお届け致します。

今回の内容に関しては特に言うべき事はありません。いつも以上に、読んでくださった方の感じたままにお任せします。

小ネタ的な話をする、ヘヤタガラスの『レーザー・ジュッテ』は『ガンダム0083』に登場する『ビーム・ジュッテ』が元ネタです。刀身が高熱を帯びる際のギミックは、『リリカルなのはA』のカートリッジシステムと、『スクライド』の主人公・カズマのアルターである『シエルブリット』が元ネタです。

こういうの、オタク的には楽しくて仕方ありません。

それでは謝辞を。

今回もチェックをしてくださった紙白さんに感謝を。ありがとうございます。まさかヘヤタガラスを小説で使う最初の機会が、スパインアウト作品になるとは思いませんでした。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。やはり戦闘シーンが長く書けません、充分ですか？ 足りませんか？ よろしければ、それも知りたいです。

構成次第で次回、いよいよ最終話です。明言は出来ませんが、完結までお付き合いいただけると嬉しいです。

2016/5/7 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る